

## レナード・バーンスタインにおける 中年期危機とその後の音楽活動

大谷 正人\*

### Leonard Bernstein's Middle-age Crisis and his Subsequent Musical Life

Masato OTANI

#### < 抄 録 >

レナード・バーンスタインは20世紀にアメリカが生んだ大指揮者兼作曲家として、世界中で活躍し、多くの人々から愛された。バーンスタインにとって、1970年代の後半を中心とした危機的状況は重要な意味を持つと考えられる。作曲家として後世に残るようなシリアスな名曲を作曲したいという思いのため、1969年にニューヨーク・フィルハーモニックの指揮者を辞任したが、その後に作曲した大曲はいずれも期待したような評判は得られず、熱狂的な歓迎の得られる指揮活動を中心にせざるを得なかった。また1976年から1年近くバーンスタインは、妻のフェリシアと別居し男性の愛人と暮らしていたが、その別居中に発症したと思われる肺癌のため、1978年フェリシアは死去した。その悔恨の思いはバーンスタインの生涯続き、その後の音楽活動にも影響を及ぼした。特に演奏面での変化は著明で、遅い曲でバーンスタインの取るテンポは時々極端に遅くなっていった。

#### はじめに

20世紀の後半のクラシック音楽界において、レナード・バーンスタイン(1918-1990)は情熱的な指揮者・作曲家として、また政治信条をもって行動する音楽家として、クラシック音楽を愛する人々の心に強烈な印象を残している。筆者もバーンスタインの演奏や作品に触れ、他では得られないような感動を体験した一人である。しかし、バーンスタインの音楽(特に指揮)に接すると、バーンスタインがニューヨークを中心に活躍した青年・壮年期(1960年代まで)と、ウィーンをはじめ世界中で活躍した初老期(1980年代)とで大きな差異があることに気づく。バーンスタインは、自分をまず第1に作曲家だと考えていたのにもかかわらず、作曲家としての名声は、「ウェスト・サイド・ストーリー」の時の名声を結局越えられずに、指揮者としての名声の方ばかり高まっていったという矛盾を抱えていた。また、中年期(1970年代)のバーンスタインの演奏にある種のスランプを感じたのは、筆者だけではないだろう。実際にバーンスタインは、中年

期に危機的状況も体験した。

本研究では、バーンスタインの生涯を、特に中年期危機という視点から演奏・作曲活動について触れながら論じた。なお、バーンスタインの生涯を述べるにあたっては、バートン<sup>4)</sup>、マイヤーズ<sup>7)</sup>、レスニック<sup>12)</sup>らによる伝記を参考にした。

#### I バーンスタインの生涯

バーンスタインは、1918年8月25日、マサチューセッツ州ローレンスでユダヤ系ロシア移民の両親のもとに生まれた。父親サミュエルは、裕福な家庭生活を得るために実業家として奮闘したが、芸術にはそれほど興味を示さなかった。母親ジェニーは聡明であったが、家事を怠けたりし、金銭面でサミュエルとは口論が絶えなかったという。10歳の時、叔母が引っ越しの際、ピアノをバーンスタインの家に残していったことをきっかけに、バーンスタインの音楽との深い関わりが始まった。バーンスタインが音楽に情熱を示すようになって、サミュエルは、バーンスタインが自分

\* 三重大学教育学部 : Mie University, Faculty of Education

の跡を継ぐ勉強をせずに、音楽の道に進むことに反対し、経済的な援助も十分にはしなかった。1930年代、バーンスタインがまず情熱を示したのは、ピアノに対してであり、ハインリッヒ・ゲブハルト、ヘレン・コーツというピアノ教師のもとで学び、1935年にハーヴァード大学の音楽専攻課程に進んだ。ハーヴァード大学は、知的刺激や実業的なつながりは豊かなものの、音楽的には、ニューヨークのジュリアード音楽院よりは劣っており、父親をなだめるための妥協的な進路であったと考えられている。

1937年、バーンスタインはラヴェルのピアノ協奏曲でピアニストとしてのデビューを果たすが、同年、指揮者ミトロプーロスとの出会いの中で、作曲の才能を磨くようすすめられ、また1940年にはボストン交響楽団の指揮者クーセヴィツキーの指導のもと、指揮者への修行を始めた。1942年、交響曲第1番「エレミア」を完成させ、翌1943年、ニューヨーク・フィルハーモニック（以下フィルハーモニックやフィルハーモニー管弦楽団はフィルと略称）の副指揮者を音楽監督のロジンスキーから薦められて2ヶ月務めたが、指揮者ワルターの急病のため急遽代役でニューヨーク・フィルを指揮し大成功を収めた。この後、バーンスタインは指揮者として、アメリカ各地、そしてイスラエル（当初パレスティナ）のような外国でも指揮者としての活動を広げると同時に、「オン・ザ・タウン」などミュージカルの作曲も続けていった。バーンスタインが作曲家として最も成功を得たのは、1957年のミュージカル「ウェスト・サイド・ストーリー」においてであった。家庭的には、1951年俳優フェリシア・モンテアレグレ・コーンと結婚し、二人の間には3人の子どもが生まれた。指揮者としては、1956年にニューヨーク・フィルの首席指揮者に就任、1969年までその地位に留まった。なおフェリシアについて、バーンスタインは晩年に、「私はかつてどんな女性もフェリシアのように愛したことはありません。それは輝かしく優しく聡明な人で、天使そのものでした。」と回想している<sup>29</sup>。

1970年、ニューヨークの自宅でバラック・パンサー党の資金調達の手配が開かれた。これは、妻のフェリシアが公民権運動の一環として支援しようとしていたものであるが、バラック・パンサー党が、革命を志向する危険な評判の悪いグループであったため、バーンスタインもマスコミから批判されることになった。ニューヨーク・フィルの首席指揮者を退任した最大の理由は、作曲活動に時間をかけたいということであったが、1970年頃から作曲し1971年に初演をしたミサ曲などに対しては批判も多く、結局活発な指揮活動をウィーンを始めとして世界中に移すことになっていった。ま

た当時から、スタジオ録音が激減し、ライブ録音が中心となっていった。

1970年代の後半、バーンスタインにとって、最も危機的な時代となった。マイヤーズ<sup>30</sup>が述べているように、バーンスタインは伝統的な家族の絆に強い意識をもつバイセクシュアルであった。フェリシアは、彼の不倫関係を強いて責めようとはしないものの、それらについて確実に把握し、バーンスタインに忠告していた。1976年から1977年にかけて1年間近くバーンスタインは男性の愛人とともに暮らし、フェリシアと一時別居生活となった。その別居生活の間にフェリシアの肺癌が発症し、1978年6月16日にフェリシアは亡くなった。自責の念から、喪中から同年8月25日の60歳の誕生日まで、バーンスタインは公の場に姿をみせなかった。バーンスタインの60歳記念のコンサートは、友人のロストロポーヴィッチが常任指揮をしているワシントン・ナショナル交響楽団の資金援助の目的もあったため実施された。そのコンサートの幕間で知人からフェリシアの生前の苦しみなどを聞かされたバーンスタインは、ベートーヴェンの3重協奏曲を指揮したが、当時のことを後日以下のように語った<sup>31</sup>。「指揮台に上がった時、私は、世界全体が自分の頭の上に崩れ落ちるような感じました。そして私は、もはや以前のような指揮者ではありませんでした。誰がベートーヴェンなのかもわからず、私がしていることにどんな意味があるかも、わからなくなってしまったのです。」

この後、子どもたちの誘いで、ジャマイカに旅行し、音楽への情熱を取り戻したバーンスタインは、1979年には、生涯で初めてベルリン・フィルを指揮しマーラーの交響曲第9番の名演を聴かせ、1980年にはボストン交響楽団100周年のためディベルティメントや、戦死したイスラエルのフルート奏者に捧げられた「ハレル」を作曲するなど、仕事に没頭していった。1980年から1983年にかけて、唯一のオペラ「静かな場所」を作曲したが、初演時の聴衆や評論家の反応は、バーンスタインを失望させるものであった。しかし、バーンスタインの活動は、指揮や作曲のみならず、仲間とのパーティーまでも、健康を無視したペースで続けられた。世界市民としての自意識も強く、1989年にはベルリンの壁の崩壊を記念するコンサートで、ベートーヴェンの交響曲第9番を指揮したが、健康状態は当時から進行性の肺気腫のため徐々に悪化していた。1990年、札幌での若い音楽家を育てるためのパシフィック・ミュージック・フェスティバルを指揮し終えた3ヶ月後、10月14日、72歳の生涯を閉じた。

## II バーンスタインにおける中年期危機

### 1. 中年期危機について

現在、中年期の男性の自殺率が、他の世代と比べ非常に高くなっている。小此木<sup>9)</sup>も指摘しているように、現代社会特有のストレスのために、中年期は誰もが危機に出会わざるを得ない時期となっている。危機を体験する中で、新しい生き方を再獲得していくことがしばしば必要となる。

中年期危機について、岡本は次のように述べている<sup>9)</sup>。

「中年期の入り口において体験される否定的な自己意識は、われわれに、自分の人生はこれでよかったのか、本当に自分のやりたいことはなんなのかという自分の生き方、あり方そのものについての内省と問い直しを迫るものである。それは、いままでのアイデンティティでは、もはや自分を支えきれないという自覚であり、アイデンティティそのものの危機であると考えられる。」

岡本の指摘は、中年期危機の中心的問題であるが、その背景としては、吉松<sup>13)</sup>が指摘しているように、各種喪失体験の連続、孤独の寂しさの増幅、社会的役割の変換、これまでの人生の回顧と反省、今までの防衛機制の破綻と防衛されていた幼少期葛藤の再燃、自らの幼児期問題の内面的解決の必要、老年や死に向けての意識の高まり、身体と精神の解離などの問題が存在する。

大音楽家にとっても、中年期危機の存在は例外では

ないだろう。例えば、ベートーヴェンが中年期に異性との愛や結婚という幸福を断念し、その後甥カールの自殺未遂によって、家庭という願望も諦め、作曲様式上、大きな変遷を遂げたのも、中年期危機との関連で論じることにも可能である<sup>11)</sup>。マーラーも47歳の時大きな危機を迎え、その後に生き方まで模索しなければならなかったことが作曲様式の大きな変化につながっている<sup>10)</sup>。それまでに一流の音楽家として、社会から賞賛を得て、自己の芸術に自信を持っている芸術家にとっても、中年期危機は重大なことがしばしばあり、バーンスタインの場合もその例外ではなかった。

### 2. バーンスタインの場合

1969年は、バーンスタインにとって大きな転機の年であった。長年務めていたニューヨーク・フィルの首席指揮者を辞任したこと、そして若いときに確執があり、大きな影響力を持っていた父親のサムが死去したことのためである。従って、バーンスタインは1969年以降、身体的にも精神的にも自由な活動が可能となった。ニューヨーク・フィルを辞任した最大の理由は、作曲のための時間を作りたいということであった。しかしニューヨーク・フィルの指揮活動のため多忙であった1960年代より、1970年以降、曲数は増えるものの1940年代の交響曲第1番「エレミア」、1950年代の「ウェスト・サイド・ストーリー」におけるような名声を獲得することはできなかった(表1)。同

表1 バーンスタインの主要作品

曲目<ジャンル>	作曲年代(初演年代)	演奏時間(分)
交響曲第1番「エレミア」	1942(1944)	25
ファンシー・フリー<バレエ>	1944(1944)	27
オン・ザ・タウン<ミュージカル>	1944(1944)	
ファクシミル<バレエ>	1946(1946)	19
交響曲第2番「不安の時代」	1947~1949(1949)	35
タヒチ島の騒動<オペラ>	1951(1952)	
セレナード<ヴァイオリン協奏曲>	1954(1954)	30
キャンディード(初版)<ミュージカル~オペレッタ>	1954~1956(1956)	
ウェスト・サイド・ストーリー<ミュージカル>	1955~1956(1957)	
交響曲第3番「カディッシュ」	1962~1963(1963)	39
チチェスター詩編<合唱曲>	1965(1965)	19
ミサ曲	1970~1971(1971)	
ディバッグ<バレエ>	1974(1974)	48
ペンシルヴァニア街1600番地<ミュージカル~オペラ>	1974~1975(1976)	
ソングフェスト<連作歌曲>	1977(1977)	43
ディヴェルティメント<管弦楽曲>	1980(1980)	15
ハリル<フルート協奏曲>	1980~1981(1981)	16
静かな場所<オペラ>	1982~1983(1983)	
アリアとバルカローレ<歌曲集>	1988(1988)	
オーケストラのための協奏曲(ジュビリー・ゲームズから改作)	1985~1989(1989)	30

(なお、バレエ曲などの演奏時間は、管弦楽のための組曲に改編されたものの時間である。演奏時間は、バーンスタイン自身による演奏が残されているもののみ記した<sup>6)</sup>。またジャンルも便宜的につけただけのものである)

じく作曲家兼指揮者で、バーンスタインが生涯にかけて最も情熱を注いだマーラーに比べて、バーンスタインには、シリアスな領域での作曲において、後世に残る名曲として認められている曲がないというのは、最も大きなコンプレックスであったと思われる。

バーンスタインの同性愛が原因となった妻フェリシアとの1年近くの別居生活、フェリシアが1977年に発病し、1978年6月16日に死去したことについては、バーンスタインはその後の生涯ずっと悔恨の情を持ち続けることとなり、バーンスタインの音楽にも深い影響を残した。当時のことを、バーンスタイン自身、次のように回顧している<sup>2)</sup>。

「1978年は私の生涯で最悪の年でした。私にはもう指揮することも作曲することもできませんでしたし、絶えず一種の罪悪感に責め苛まれていました。そうした感情を私はいまだ完全に拭えないでいます。彼女の病気の引き金を引いたのは私だったのか? (中略) 彼女の死は私に責任があると感じています。」

フェリシアの死後、バーンスタインは仕事から数ヶ月遠ざかっていたが、指揮や作曲の依頼に次第に以前のように応じるようになり、1981年からは多忙な生活に戻った。このように、バーンスタインにおける中年期危機は、音楽上は「シリアスな分野で後世に残る音楽を作曲したい」という欲求から、指揮者としての生活を減らし、作曲にエネルギーを注いだが、それのみあう評価や成果は得られなかったこと、私生活上は、同性愛による妻との別居とその後の妻の死という破局の体験として現れた。この危機をバーンスタインは、子供達や友人の支え、そして指揮・作曲における活動で乗り越えようとしたが、煙草やウイスキーなどへの依存は、以前よりも強くなっていった。

バーンスタインは、晩年におけるインタビュー<sup>2)</sup>で、自分自身について全く正反対のことを言っている。

「私は幸せな音楽家だと思っています。自分の生涯を通じてレナード・バーンスタイン以上に幸せな人間に出会ったことはない、とあなたに言えるほどです!」

「私は呪われた人間、あるいは愚か者だと告白しますよ。ああ、私はためらわずにそうした形容語を自分に当てはめますし、そのうえ、それは本当なのです。実際、自分で最初に、自分がこんな風であることに絶望し、自分を馬鹿者、白痴、愚か者と見なしているんですから! 私の妻のフェリシアは、1978年6月16日に、煙草が原因のひどい肺癌で世を去りました。彼女が亡くなって12年経つのに、私が沢山煙草を吸い続けるなんて、馬鹿げていますし、常軌を逸してすらいまず。私は実際何ら学ばなかったわけです!」

バーンスタインは、妻の死後12年間も、指揮・作曲・教育などの活動で多忙で、特に指揮活動における

名声は高まり、いつも彼の賛美者たちに取り巻かれ、夜通しのパーティーも多かったが、内面的では矛盾を抱えたままで苦悩が続いた。バーンスタインの抱えた矛盾は、指揮者/作曲家、同性愛者/異性愛者としてだけではなく、自己陶酔的/自己批判的、ユダヤ系アメリカ人/世界市民、ロマン主義者/現代人などの形でも現れた。1980年代の中頃には、家族や友人という時、バーンスタインはわがままが高じること多かったが、娘のジェイミーは当時のことを以下のように振り返っている<sup>4)</sup>。

「以前にくらべ、父といっしょにいることはとても大変でした。スコッチの量が増え、デキセドリンに頼ることが多くなりました。(薬とアルコールを併用した時のバーンスタインは) 人格が変わり…意地が悪くなって、怒りっぽくなりました。ひとに悪口雑言を浴びせ、テーブルをたたいては火のついたタバコを投げつけるのです。たいていは父がいると苦痛で、父といっしょにいて楽しい時間は特別な例外、そんな感じでした。母は亡くなっていましたから…父をたしなめるのは私たちしかいませんし、私たちにしても、いっしょに暮らしているわけじゃありませんから限界がありました。だから結局は“マエストロが王様”だったのです。」

バーンスタイン自身、最後の年である1990年には、次のように語っている<sup>2)</sup>。

「私の妻よりもずっと沢山、私はお酒を飲み、煙草を吸い、指揮している時ばかりか私生活においても同様に、狂ったように暴れます。それが、現実なんです。そうしたことはすべて、すでに不安定なものになっている私の健康状態を悪化させるばかりだということを十分承知しています。けれども、もし私が今、突然、煙草を吸ったりお酒を飲んだりするのを止めたら、私は明日には死んでしまうでしょうし、あなたは私の次の演奏会にではなく、私の葬式にいらっしやることになるでしょう。今さら、私をそれらの習慣から引き離すことはできないのです。」

バーンスタインがその生き方において、中年期危機を克服したかどうかについては、議論を呼ぶところで、特に1980年代の自己耽溺の強い生活の乱れについて、否定的意見を述べるバーンスタインの知人も少なくない<sup>5)</sup>。しかし、音楽創造面、特に指揮活動においては、バーンスタインの名声は死ぬまで高まっていった。

### III バースタインの音楽創造における中年期以降の変遷

#### 1. 作曲活動において

バーンスタインの作曲様式は、マイヤース<sup>7)</sup>が述べているように、ヘブライの礼拝、クラシックのレパー

トリー、ジャズ、ポピュラー・ミュージックの混合物であった。その基本的な要素は変わらなかったが、その中でバーンスタインは様々な実験を重ねていった。

バーンスタインの音楽活動については、「ウェスト・サイド・ストーリー」が驚異的な人気を博した以降の時代では、10年間という単位で作曲活動についても考えることができるだろう。そして、60年代、70年代、80年代の前半にそれぞれ交響曲第3番「カディッシュ」、ミサ曲、「静かな場所」という大作が作曲され、それらがそれぞれの時期を代表しているように見える。しかし、これらの作品はすべて、初演時から賛否両論があり、高く評価された作品ではなかった。

中年期危機を経た後の1980年代の作品においても、その実験的性格、多くのジャンルの音楽の混合、騒然とした部分と宗教的な深淵な部分の混在といった特徴のためもあるのだが、大曲ほど混沌としたイメージを与えることが多い。一曲の中に矛盾を抱えたその傾向は、最後の大作である「オーケストラのための協奏曲」まで続いていた。しかし、規模の少し小さい作品などには名曲もあり、フルート、弦楽器、打楽器のためのノクターン「ハルル」では、調性と非調性の衝突の中で、すばらしく詩的な部分がある<sup>9)</sup>。また中年期危機の後の最初の本格的な作品であるディベルティメントにおいても、誰にも愛されるようなワルツのような珠玉の小品（譜例1）<sup>9)</sup>も作曲していた。

## 2. 指揮活動において

中年期・初老期における生活の乱れについては、友人や家族によってしばしば報告されているが、指揮の演奏会の前に、曲の勉強を十分にしている習慣は保たれていた<sup>9)</sup>。このような曲への十分な研究も背景にあったが、バーンスタインの指揮の特徴を一言で言うならば、それは作品への深い共感と20世紀の音楽や諸状況に対する危機意識<sup>1)</sup>に裏付けされた異常な程の没入力ではないだろうか。お気に入りの作品の指揮をする時に、それらの曲をあたかも自分が作曲したかのように感じてしまうことがよくあったとバーンスタインは述べている<sup>9)</sup>。またイスラエル・フィルとの1985年9月における東京公演でのマーラーの交響曲第9番の演奏は、バーンスタイン自身、非常に満足のいくものであったが演奏が終わると、舞台の袖に立ちすくみ、赤ん坊のように泣いて、お辞儀をするために舞台に戻ろうともしなかった、と伝えられている<sup>9)</sup>。バーンスタイン自身、「オーケストラのメンバーたちは、音楽の持つ強烈さを私から受け取らなければならないのです。オーケストラ指揮者は作曲家の身代わりになるわけで、私は、ですから、自分自身が作曲家になった気になります。そのようなわけで、指揮をする時、私は『トラン

ス』状態に入っていくのですね。」とも「チャイコフスキーの悲愴交響曲やマーラーの第9交響曲を指揮した後では、もはやノーマルな人間ではられません。（中略）マーラーの陰鬱な呼びかけにどうやって苦痛を感じないで耐えることができるのでしょうか。」とも述べている<sup>9)</sup>。

指揮においては、作曲におけるより、バーンスタインの中年期以降の変化はずっと明らかである。最も明らかな変化がテンポの設定にみられ、バーンスタインのテンポは、晩年になるにつれて、遅い曲において時々極端に遅くなっていった。バーンスタインが最も愛し、その曲の精神への深い共感によって、筆者自身を始め、最も多くの人々に感動を与えた作品であるマーラーの交響曲第9番を例にとりて確認してみたい。この曲の初演者でマーラーの直弟子でもあるワルターの1938年の録音が全曲で70分、1961年の録音が81分であるのに対して、バーンスタインの1965年のニューヨーク・フィルとの録音が78分、1971年のウィーン・フィルとの録音は81分、1979年のベルリン・フィルとの録音は82分、1985年のアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団との録音は89分と年々遅くなっていくのがわかる。年をとるにつれてテンポが遅くなっていくという現象は、バーンスタインに限らず多くの演奏家にしばしばみられる。しかし、バーンスタインの場合かなり極端で、晩年のバーンスタインの演奏がしばしば批判されたのは、多くの場合、異様な程のテンポの遅さ（特にテンポの遅い曲における遅さ）についてであった<sup>9)</sup>。遅いテンポの演奏が名演であるためには、より強い緊張感と表現力が演奏に求められる。

テンポの遅さは基本的には演奏家の解釈や好みなのであるが、その背景としては、死に向かって、加速度的に自己耽溺の傾向を示す生き方と、繰り返し作曲を試みるが、期待したほどの成果が得られなかった絶望感、またフェリシアへの永続する罪責感、音楽や政治状況などに対する深刻な危機意識<sup>1)</sup>などの諸要因が影響しているのではないだろうか。ただ、多くの大作曲家が晩年になって、テンポの遅い曲の中に名曲をつくっていったのに対して、バーンスタインの場合、作曲においては、そこまで著明な変化は認められなかった。

## おわりに

バーンスタインは、20世紀後半のクラシック音楽において、最も魅力的な存在であると同時に、多くの矛盾を抱えた存在であった。アルコールやタバコなどへの依存などはあったものの、病跡学の立場からは、特定の診断学的位置付けをするより、中年期危機としての面から論じるのが、バーンスタインの生涯と音楽を

より深く理解する上で、適切であると思われる。自らの同性愛の罪責とも関連づけてしまう妻フェリシアの死、および作曲家兼指揮者としての存在が、自意識と社会からの認識で大きく引き裂かれていることに象徴される中年期危機以降のバーンスタインは、その行動や作品において、ますます多くの矛盾を抱えていった。

作曲面では、バーンスタインの作品は、クラシック以外の音楽も含めた様々な様式の混合物であり、珠玉の作品はあるものの、作曲様式としては、晩年になっても静騒の混在した混沌とした印象は否めないだろう。しかし、演奏面では、その感情移入の強烈さや曲への深い共感により、テンポはしばしば極端に遅くなったが、曲の演奏に込められた感情の振幅はより深くなり、聴衆に終生忘れがたい感動をしばしば残していった。

## 文 献

- 1) Bernstein, L.: *The Unanswered Question. Six Talks at Harvard.* Harvard University Press., Cambridge, Massachusetts. 1976 (和田旦訳『答えのない質問』みすず書房、東京、1978)
- 2) Bernstein, L., Castiglione, E.: *Una Vita per la Musica.* Editoriale Pantheon Srl, Roma, 1991 (西本晃二監訳、笠羽映子訳『バーンスタイン 音楽を生きる』青土社、東京、1999)
- 3) Bernstein, L.: *Orchestral Anthology, Volume 2.* Boosey & Hawkes, London, 1998
- 4) Burton, H.: *Leonard Bernstein.* ダブルディ社, 1994 (棚橋志行訳『バーンスタインの生涯 上・下』福武書店、東京、1994)
- 5) Burton, W. W.: *Conversations about Bernstein.* Oxford University Press, Inc., London, 1995 (山田治生訳: 『バーンスタインの思い出』音楽之友社、東京、1997)
- 6) Gottlieb, J., Gradenwitz, P.: *Bernstein conducts Bernstein.* Deutsche Grammophon GmbH, Hamburg.
- 7) Myers, P.: *Leonard Bernstein.* Phaidon Press Limited, London, 1998 (石原俊訳: 『レナード・バーンスタイン』アルファベータ、東京、2001)
- 8) 岡本祐子: 「中期とアイデンティティ —— アイデンティティの再確立と安定へのプロセス」(鑑幹八郎ほか編) 『アイデンティティ』日本評論社、東京、pp. 73-84、1999
- 9) 小此木啓吾: 『現代人の心理構造』日本放送出版協会、東京、1986
- 10) 大谷正人: 『音楽のバトグラフィー —— 危機的状況における大音楽家』大学教育出版、岡山、2002
- 11) 大谷正人: 「大作曲家における聴覚障害の受容 —— ベートーヴェン、スメタナ、フォーレの場合」三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学、55; 1-10, 2004
- 12) Resnick, E.: *Leonard Bernstein: un chef inspire.* Editions Josette Lyon., Paris, 1996 (伊藤制子、柿市如訳: 『レナード・バーンスタイン 情熱の指揮者』ヤマハミュージック

メディア、東京、2002).

- 13) 吉松和哉: 「中期のうつ病」(広瀬徹也、樋口輝彦編) 『臨床精神医学講座 4. 気分障害』中山書店、東京、pp. 469-482、1998

譜例1 ディヴェルティメントの第2曲「ワルツ」の冒頭<sup>9)</sup>。この美しい音楽は、  
調性音楽に対するバーンスタインの信仰を示すと共に、自身の心の傷を癒す  
音楽のようでもある。

II. Waltz

157

**Allegretto, con grazia** (♩ = 63, ♩ = 96)  
sul D

Violins I  
*p, quasi flautando*

Violins II  
*p, legg.*

Viola  
*p, legg.*

Violoncello  
*(arco) p, legg.*

Contrabass  
*pizz. p, legg.*

Vlins. I  
*cresc. un poco mp*

Vlins. II  
*cresc. un poco mp*

Vla.  
*cresc. un poco mp*

Vcl.  
*cresc. un poco mp*

Cbs.  
*cresc. un poco mp*

**A**

Vlins. I  
*mf p sub.*

Vlins. II  
*mf p sub. poco marc.*

Vla.  
*mf p sub.*

Vcl.  
*mf p sub.*

Cbs.  
*mf p sub.*

Vlins. I  
*mf, cresc. f dim. mp sul D*

Vlins. II  
*cresc. mf, cresc. f dim. mp espr.*

Vla.  
*cresc. mf, cresc. f dim. mp*

Vcl.  
*cresc. mf, cresc. f espr. dim. mp*

Cbs.  
*mf, cresc. f espr. dim. mp*

